

序論..... 吉川真司 3

I 古代の時間と空間

時空間情報科学からみた日本の時空観..... 宇野隆夫 15

日本古代国家形成と時空観..... 下垣仁志 29

古代日本の空間意識に関する覚書..... 門井直哉 59

日本古代における王都の空間認識..... 林部 均 83

日出処・日本の元日朝賀と銅鳥幢..... 西本昌弘 109

古代における国郡領域編成の一考察——備前・美作の事例——..... 今津勝紀 133

日本古代のオホヤケ構造..... 大津 透 171

古代日本の農事慣行と地方官人..... 武井紀子 193

Ⅱ 古代から中世へ

陰陽道の成立についての試論……………細井浩志 227

——呪禁師との関係と「初期陰陽道」概念について——

亀卜の時空……………井上 亘 259

親王にとつての過去・現在・未来……………畑中彩子 301

——『吏部王記』に見る日記執筆の意図——

『御堂関白記』古写本・寛仁元年九月三十日条と

十月一日条の書写順序をめぐって……………倉本一宏 333

『今昔物語集』の成立と宋代……………荒木 浩 355

——成尋移入書籍と『大宋僧史略』などをめぐって——

法隆寺所蔵『五天竺図』にみる仏教的世界認識の更新……………横内裕人 387

——仮想現実としての補陀落山の登場——

日本中世生霊試論……………徳永誓子 423

Ⅲ アジアという視座

『十節記』新考……………劉 暁峰 445

古代東アジア世界における高句麗勢力圏……………井上直樹
——倭勢力圏理解の端緒として——

梁の武帝と転輪聖王……………河上麻由子 489

中国南方の新羅人——浙江省台州の地名を手がかりに……………榎本 涉 519

契丹国(遼朝)の祭祀・儀礼に関する歴史の変遷と方位観について……………武田和哉 555

あとがき——「時空」論集に向けて——……………倉本一宏 593

共同研究会開催一覧
執筆者紹介

序論

吉川真司

日本における古典的・伝統的な時空観はいつ、どのように形成されたのであろうか。このことを多面的に考えるべく、私たちは国際日本文化研究センター（日文研）において一年間の共同研究を組織した。本書はその主要成果を取りまとめ、今後の議論のためにさまざまな素材を提供しようとするものである。

ここである「時空観」とは、時間意識と空間意識の総称である。個人や集団がみずから取りまく外界を意識し、しかるべき解釈を与え、その理解・言説を活用しようとするとき、時間と空間の双方が——たとえ両者の関係が明確でなくとも——問題として浮上するであろう。仏教用語では「世」を「過去・現在・未来」、「界」を「東西南北・上下」とし、「世界」に時間・空間を含みこませる例がある。この場合、「時空観」と「世界観」は近い。しかし、「世界」は「世の中」「地球上」「宇宙」などを指すのが一般的で、「世界観」と言えばふつう空間意識に限定されるから、本書では簡明な「時空観」の語を用い、日本における時間意識・空間意識の形成について考えてみたい。

時間も空間も人間によって認識され、言語化されるものであるから、古今東西の時空観にはそれらを生み出した社会の諸条件、より具体的に言えば、社会の基盤となる地勢・気候と生態系、その上に展開される親族・生業

の組織形態、さらに社会内外の政治・交通関係、そして思想・宗教を始めとする諸文化などが刻印されていた。こうした諸条件はむろん瞬時に成立するものではなく、それゆえ時空観もまた歴史的に生成し、時とともに移ろいゆくものであった。時空観を広く深く分析することにより、個々の歴史的社會に関する認識はいっそう豊かなものになるはずである。

日本人の時間意識は元来、四季の区分がはつきりし、暑さも寒さもさほど過酷ではない温帯モンスーン気候に根ざすものであったろう。季節のめぐりから導き出される「円環的な時間」——永遠に繰り返される時間の意識。それは夜と昼、ハレとケを振幅する「反復的な時間」とともに、時間意識の古層として『万葉集』の時代にも跡をとどめていた。しかし、それとともに、過去から現在を経て未来へと向かう「直線的な時間」の意識も確かに存在したと考えられる。世界の始原と終末を措定するヘブライズムの「線分的な時間」ほど強烈でないとしても、決して繰り返すことなく流れていく時間⁽¹⁾。それは人間の一生を省察するとき、また地域社会や国家の歴史を振り返るとき、当然の想念として湧出するものである。可逆・不可逆という点で対照的な二つの時間意識は、古代前期（律令体制以前）にも共存しており、年を単位とする時のめぐりによって社会と政治が動く一方、大王の治世によって歴史の流れを区切ることもなされていた。

しかし、五世紀に伝来した暦法は、天体の運行と干支の循環を基礎としつつ、複雑な技術によって時間を秩序づけるツールとして深甚なる影響をもたらした。古代後期（律令体制期）には暦法が列島社会のすみずみまで行き渡り、人々の生業と行政にリズムを与え、中央では朝廷儀礼が年中行事として確立していった。暦法は王権による時間支配の手段にほかならず、さらには遙かなる過去を整理する力さえあつたから、歴代大王の治世に具体的な紀年を与え、中国的な歴史書を編纂することも可能となった⁽²⁾。また、時刻を計測・表示する制度も導入され、

王都の一日は鐘と鼓の音によって拍子がとられて、夜と昼の神話的断絶は少しずつ薄らいでいく。

日本の古代後期を特色づけ、前近代を通じて用いられ続けた暦法と時刻制は、言うまでもなく中国の時間システムである。中国の古典的な時間意識は、陰と陽を循環しながら、「道」が「無始無終」の虚無の流れを形づくるといふ「直線的な時間」観であったとされる。かかる徹底的な虚無に対抗し、人倫的原理によって現実世界の秩序を維持するのが為政者の務めであったともいふ。⁽³⁾ 歴史書も暦法も時刻制もそうした態度と不可分ではあった。ただ、古代中国においても原始的・神話的な時間意識、すなわち「円環的な時間」観があり、これを否定することで「直線的な時間」意識、あるいは歴史意識が形成された可能性が指摘されている。⁽⁴⁾ 仮にそうだとすれば、「可逆から不可逆へ」といふ時間意識の転換は古代中国で独自に発生したことになる。世界的に見れば、これはごく一般的なことなのだろうか。その上で中国周辺社会、とりわけ古代日本の時間意識の変化はどう理解されるべきなのか。「王統譜から歴史書へ」といふ発展を念頭に置き、万葉集と古今集の時間意識に差異を認める議論を見すえながら、⁽⁵⁾ 周到な検討が望まれるところである。また、日本の古代後期に確立する時間意識・歴史意識が、中世の基盤となったことは容易に想定できるが、その具体的プロセスをたどることも重要な課題であろう。日本的時間意識の形成を考える上では、古代前期から古代後期への転換をもたらしたもう一つの思想的基盤、すなわち仏教の影響を見定めねばならない。インドには時間意識・歴史意識が欠如していたともされるが、⁽⁶⁾ 仏教經典には永遠・無限と言うべき時間記述が見られる。しかし、古代日本人の精神に強く作用したのは、仏教の無常観と現世・来世の観念であつたらしく、文学や美術にもそれははっきり看取できる。さらに八世紀後葉以降、仏教学が隆盛を迎えるなかで仏滅年代が盛んに議論され、流伝・諍論・相承からなる「仏教の歴史意識」が形成された。⁽⁷⁾ それが正法・像法・末法の時代観を問題化させ、「うつりかわり」の美意識⁽⁸⁾とともに、中世に継承される時間意識を形作るのである。なお、生活レベルにおいては梵鐘の役割が看過できない。仏都の官大寺でも、各

地の山林寺院でも六時の鐘が鳴りわたり、都鄙の僧俗の生活意識を神話的世界から引きはがしていった。

日本人の空間意識は、日本列島という島嶼社会において育まれた。その大地は山や川によって小さく区切られ、大陸のような茫漠たる広がりをもたない。しかし、列島をとりまく海は水平線の彼方まで続き、外的社会との通路にもなっていた。こうした地理的環境から生まれた空間意識は、日常生活ゾーンの認識に始まって、地域的な政治領域、さらには国家領域をどのように説明し編成するかという関心へと広がり、さらには列島を包摂する全世界のなかに自分たちをどう位置づけるかという問題にも及んだ。

歴史的に見れば、古代前期（律令体制以前）に原初的な政治領域「クニ」が形成され、その集合体である「天下」を大王が支配した。「天下」は中国で生まれた政治的領域観念であるが、その内容について「天に覆われた地上のすべて」⁹と見る学説と、「皇帝による実効支配領域」中国（九州）とする学説¹⁰が対峙している。前者を採れば、倭・日本の天下は中国の天下から離脱した「小世界的天下」となり、後者に拠れば、倭・日本の天下も大王・天皇が実効支配する領域、つまり「大八洲」と同義になる。私見は支配領域説を是とするが、ことは所謂「東夷の小帝国」論の当否につながり、日本古代の華夷思想の評価、さらには近世統一政権の「天下」言説の理解にも影響する。アジア諸王朝の「天」「天下」観念を見わたすことを含め、いつそう幅広い検討が必要であろう。

『古事記』の世界観もこれに関わる。¹¹高天原（アメ）の力で葦原中国（クニ）が生成され、その葦原中国を中心に朝鮮をも含む「天下」が形作られて、天孫たちの支配領域になったとする言説——こうした読みは「小世界的天下」論に連接するが、実のところ「天下」実効支配領域」説による読み替えも可能である。また、『古事記』の原史料として帝紀・旧辞が存在した以上、かかる言説を古代後期（律令体制期）の産物と見なすことは必ずし

も正当ではなく、『古事記』的空間意識の形成過程は柔軟に考えられてよい。「東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国」に加えて「渡平海北九十五国」と述べた倭王武、すなわち「治天下ワカタケル大王」の主張は『古事記』とどうつながっていたのか。また彼は、中国王朝の「天下」さえもが包摂される全世界をどのように認識していたのだろうか。

古代後期、列島社会空間の認識・編成はさらに精緻になった。その「四方の境」は「東方陸奥、西方遠値嘉、南方土佐、北方佐渡」とされ（追儺祭文）、実効支配領域は本州・四国・九州と周辺の島々に限定される。中世には東の限りは外浜、西の限りは鬼界島とされたが、基本的な国家領域は変わらなかった。「国一評一五十戸」の行政区画も七世紀中葉に生まれ、「国一郡一郷」として中世・近世にも襲用されていく。ただし、行政区画にあらざるムラやサトも古代には確かに存在し、それらは日常的な空間意識に近いものであったろう。さらに京（ミサト）には条坊制、農地には条里制が形成されるが、その基準となったのは直線道路であった。直線と方格の地割は古代前期には存在せず、中国の制度・理念をきまじめに導入したものと思しい。これに対応して、京図・班田図・荘園図といった方格地図の文化も生まれるのだが、どこまで古代日本の特質を認めるべきなのか、比較史的考察が要請される。また、中世以降において条里制は農地区画として踏襲され、条坊制や直線道路は姿を消していく。そのこの意味も問い直されてよい。

古代前期以来の「天下」観念も、古代後期に出現した方格地割も、中国の儒教的理念を基盤とした。しかし時間意識と同じく、空間意識についても仏教の影響は甚大であった。仏教の宇宙論・世界観⁽¹²⁾は中国思想とはまるで異なり、その伝来によって初めて、日本人は中国を相対化する視座を獲得したのである。すなわち、地上世界の中心には須弥山がそびえ、須弥山をめぐる海・山の外海に四大洲が浮かぶ。このうち南瞻部洲が天竺を中心とする人類世界であり、中国はその東北の辺境地域、日本は東方海上に位置するものとされた。須弥山像は七世紀の

飛鳥に建造されていたが、南瞻部洲意識が広まるのは八世紀中葉以降のことと考えられる。大仏蓮弁や二月堂観音像光背に図像が描かれ、菩提憍那の来航とも相俟って、天竺への認識・憧憬が深まった⁽¹³⁾。九世紀には「天竺―震旦―日本」を世界の構成要素とする三国思想（三国世界観）が確立し、さまざまな要素を付加しつつ中世的世
界観を形作っていく。南蛮人の渡来によってヨーロッパ的世界観が移入され、天竺がアジア一般のなかに埋没し
去るのは、ようやく中世末―近世初のことであった⁽¹⁴⁾。

このほか国分寺・三戒壇・六所宝塔（最澄）なども仏教的な国土意識を考える上で重要であるし、浄土や地獄も世界観の問題と言えよう。ただ、平安以降の国際意識は三国思想だけではなく、日本と中国を対概念とし、「国風文化」の文化コードとなった和漢思想も存在した⁽¹⁵⁾。三国思想も和漢思想も、朝鮮の不可視化という点で方向性を同じくし、中国的華夷思想が希薄化していくなか、日本人の世界認識を呪縛し続けることになった。

共同研究「日本的時空観の形成」の出版に際して、私はおおむね右のようなことを話した。それは歴史事実と研究課題の羅列に過ぎなかったが、大局の見通しとして、日本の古典的・伝統的時空観は古代において主要部分が形成され、中世はその深化と変容の過程ではなかったか、との仮説を立てた。一年間にわたって日文研には文献史学（日本古代史・日本中世史・アジア史）、考古学、歴史地理学、国文学の研究者二八名が集まり、それぞれの視角・方法による研究報告を行ない、活発な議論を重ねた。論題は巻末の「共同研究会開催一覧」に示したが、実証的な共同研究から得られたものは決して少なくなかった。

第一に、古代・中世の政治的空間意識について集中的に議論することができた。具体的には、①古代・中世の支配領域認識としての「天下」観の問題、②日本国家が周辺諸国家との関係において自己をどう位置づけていたかという問題（例えば三国思想）、③日本国家内部の領域編成・領域認識に関する問題、④国土・都城・寺院の方

位観の問題、などである。時代的には日本の古代前期（古墳時代）から中世まで、地域的には日本・朝鮮・中国のみならず、北アジア・南アジア・西アジアにわたる広域の比較検討を行なった。なかでも「天下」観については興味深い報告が集中し、基本的には「各王朝の実効支配領域」とみる学説が是認され、共通認識とされる一方、各時代・各地域の王朝ごとの偏差も確かに見出された。日本については古代的「天下」の変容が論じられたが、それが中世・近世の「天下」観にどうつながるかが、これからの研究課題と言えよう。

第二に、仏教的時空観が多方面において検討され、その重要性が再認識された。三国思想の展開、すなわち天竺の顕現と朝鮮の不可視化という現象が、日本的時空観において古代・中世をわかつ重要標識であることがたびたび指摘され、国内外にわたる政治・社会変動との具体的連関が論じられた。また、仏教的他界観は時間意識・空間意識の双方に関わるものだが、弥勒浄土の問題、冥界の問題、補陀落渡海の問題などが採り上げられ、古墳時代とは隔絶した他界観が古代後期に浸透し、現世的世界観と深く関わりつつ、中世的他界観を生み出した過程が跡づけられた。このほか寺院の鐘や暦が古代の時間意識に与えた影響もしばしば議論され、これまで儒教や律令など、中華王朝的支配システムとして考えられがちであった諸問題に新たな方向性が示された。もつとも、仏教的時空観のみでなく、儒教的（中華王朝的）時空観をめぐっても精緻な報告が重ねられ、貴重な新論点が提示されたことは強調しておかねばならない。儒教的時空観・仏教的時空観をバランスよく理解し、日本的時空観の形成を再構成する作業は、いよいよ喫緊の課題となりつつある。その際、やはり近世的時空観との関連が不可欠の論点となることが痛感された。

第三に、文献と非文献とを問わず、多様な史料から時空観が検討され、その意味で方法的錬磨の場となった。歴史・文学の諸文献が原本や写本に立ち返って分析され、数々の新知見をもたらしたことは何よりの収穫である。それとともに、史料の幅を拡げようとする試みが意識的になされたことは特筆される。例えば、絵画史料である

「梁職貢図」「五天竺図」「文安御即位調度図」「天寿国繡帳」「融通念仏縁起」などを用いた專論が用意され、そこから時間意識・空間意識が追究された。中世の伽藍神像から日中交渉を論じた興味深い報告もあった。また、考古学的・歴史地理学的な分析も縦横に展開され、古墳・都城・土器・木簡などのデータがふんだんに用いられた。GIS（地理情報システム）を活用した報告が複数あったことも印象的であった。世界観・時空観を考える上で、文献史料と非文献史料の壁を越えた分析が不可欠であることが図らずも明瞭となり、分析手法そのものに関しても議論できたのは嬉しいことであった。

これらの研究成果をまとめたのが本書『日本の時空観の形成』である。口頭報告とは内容を異にする力作をお寄せ下さった共同研究者もおられ、全体をどう編成すべきか、いささか配慮を要した。空間と時間でわけること考えたが、結局は「古代の時間と空間」「古代から中世へ」「アジアという視座」の三部構成とし、各部においてはおおむね時代順に論文を配列した。ただ、多忙のため原稿をお書きいただけなかった方、すでに日文研の『日本研究』に投稿された方もおられ、共同研究の成果のすべてが反映されているわけではない。また、編者でありながら、生来の怠惰ゆえ早期刊行を実現できず、貧しい序論しか記せなかった自己の不始末については、ただお詫び申し上げるほかない。

本書がひとつの叩き台となり、日本史・世界史における時空観の研究がいつそう進展することを、共同研究のメンバーを代表して心より願うものである。

(1) 「時間意識の四つの形態」については、真木悠介『時間の比較社会学』（岩波書店、一九八一年）。

(2) 鎌田元一『律令国家史の研究』（塙書房、二〇〇八年）。

(3) 川勝義雄『中国人の歴史意識』（平凡社、一九八六年）。

- (4) 内山俊彦「中国古代歴史意識の一考察」(『京都大学文学部研究紀要』三三三、一九九四年)。
- (5) 田中元『古代日本人の時間意識』(吉川弘文館、一九七五年)、平野仁啓『統古代日本人の精神構造』(未來社、一九七六年)。
- (6) 中村元『東洋人の思惟方法』第一部(みすず書房、一九四八年)。
- (7) 末木文美士『平安初期仏教思想の研究』(春秋社、一九九五年)。
- (8) 西田直二郎「うつりかわりの美」と日本文化(序説)(『読史会編『国史論集——創立五十年記念——』一、一九五九年)。
- (9) 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』(東京大学出版会、一九八三年)、石上英一「古代東アジア地域と日本」(『日本の社会史』一、岩波書店、一九八七年)。
- (10) 渡辺信一郎『中国古代の王権と天下秩序』(校倉書房、二〇〇三年)。
- (11) 神野志隆光『古事記の世界観』(吉川弘文館、一九八六年)。
- (12) 定方晟『インド宇宙論大全』(春秋社、二〇一年)。
- (13) 吉川真司「天平文化論」(『岩波講座日本歴史』三、岩波書店、二〇一四年)。
- (14) 応地利明『絵地図の世界像』(岩波書店、一九九六年)。
- (15) さしあたり、前田雅之『古典論考』(新典社、二〇一四年)。

あれはもう五年も前、二〇一二年の夏のことであった。清華大学の劉曉峰さんを外国人研究員として受け入れる相談をしていた過程で、京都大学の吉川真司さんが、「自分も共同研究会を主宰してみたい」と言い出したのである。

もはや忘れられかけていることであるが、国際日本文化研究センター（日文研）はその創立当時、各歴史学会から激しいバッシングを受け、「非難声明」を相次いで出された。詳しくは「鼎談「日文研問題」をめぐって」（『日本研究』第五五号掲載、二〇一七年）をご覧ください。「各歴史学会」の中心の一つが日本史研究会で、吉川さんもその若手メンバーであったことを思うとき、時代の変遷には感慨深いものがある。

また、日文研の側でも、それまでオーソドックスな文献歴史学者とは縁が薄く、国史学科出身の文献史学専任教員は、村井康彦・今谷明両氏を除いては在籍したことがなかった。特に東大の国史学科出身者は誰も日文研専任教員になっていなかったのはもちろん、共同研究員となったのも、管見の限りでは武光誠氏のみであった。

私は日文研に就職して以来、このような状況を、日文研の教員としても歴史学界の一員としても、憂慮しており、何とかして日文研と歴史学界との交流（和解）を促進しなければと念願していた。たまたまその当時、研究調整主幹（研究・国際担当）の任にあつたので、余計に大東なことを考えていたのであろう。

ここで吉川さんの主宰する共同研究会を立ち上げ、京大・東大・東大（日本史）学科の教員や出身者に参加していただくことで、この状況を打開する第一歩にできるのではないかと考えたのである。吉川さんのリストアップした関西中心の研究者に加え、東大の天津透さんとその関連の研究者を加えることで、歴史学界の中堅から若手

に至る中心的な研究者を揃えることができた。これは日文研にとつても、歴史学界にとつても、大きな一歩となつたはずである。吉川さんと大津さんが、日文研の共同研究会に席を並べるなんて、想像しただけでもわくわくしたものである。なお、東大のもう一人の古代史教員である佐藤信さんは、すでに私の主宰する「日記の総合的研究」に、二〇一〇年から参加されていた。

ところがその年は、「共同研究を主宰する客員教員」への応募が多く、共同研究委員会での選考は、かなり難航した。受け入れ教員の推薦演説では、「吉川さんは研究が卓越しているのみならず、人格も素晴らしい希有な存在である」と語り、その後の投票で、第一位となつた吉川さんとその共同研究会が選ばれたのである。

というわけで二〇一三年にスタートした「時空」班であったが、始まってみると、そのような思惑とは関係なく、ただただ面白い研究会となつた（特に二〇一四年三月に行なつた長崎県対馬市での所外研究会）。久々に学問に対する純粋な情熱が湧き上がってきたような気がしたものである。これはすべてのメンバーにとつても同様であつたものと思う。やはり吉川さんが設定したテーマと、二人で選んだメンバーの卓越性によるものであろう。日文研もこれに多少なりとも寄与できたとなると、いささか誇らしい。

ただ、一年間の共同研究で成果出版を行なうのは、なかなか至難の業であつた。種々の事情によつて、この論集の刊行が遅れてしまったことは、編者の一人として、ここにお詫びする次第である。しかしできあがつてみると、さすがにこのメンバーが書いた論集であり、そのレベルは、やはり自慢するに値するものであつたと、いささか自負している。

二〇一七年四月一七日

倉本一宏

「日本の時空観の形成」共同研究会開催一覧

■準備回

〈二〇一三年三月一七日〉

吉川真司「〈日本の時空観の形成〉の射程」

■第一回研究会

〈二〇一三年六月一五日〉

西本昌弘「日出処の元日朝賀と銅鳥幢」

武田和哉「東アジア地域とその周縁・日本における都城の

方位と占地について」

〈二〇一三年六月一六日〉

上川通夫「中世的時空観の成立」

荒木 浩「言語のプライバシーと物語の三国構想」

堀井佳代子「遣唐使の出発時の儀礼について」

■第二回研究会

〈二〇一三年八月一七日〉

宇野隆夫「時空間情報科学からみた日本の時空観」

大津 透「日本古代のオオヤケ構造」

〈二〇一三年八月一八日〉

本庄総子「税帳と税帳使の年度サイクル」

武井紀子「古代日本の農事慣行と地域社会」

吉川真司「天寿国繡帳の時空」

徳永誓子「絵巻物にみる時間表現―「融通念仏縁起」を素材に―」

■第三回研究会

〈二〇一三年一〇月一九日〉

河上麻由子「梁職貢図とその世界観―研究状況の紹介と今後の課題―」

井上直樹「高句麗勢力圏」と東アジア世界」

〈二〇一三年一〇月二〇日〉

下垣仁志「日本古代「国家形成期」の時空観」

今津勝紀「美作国の成立―古代における空間認識の復元的

研究（に向けて）―」

横内裕人「日本中世仏教の世界観―法隆寺蔵『五天竺』

を手がかりに―」

■第四回研究会

〈二〇一三年一二月一四日〉

倉本一宏「撰関期古記録の時間軸について―特に『御堂関

「白記」の執筆日時について―

門井直哉「古代日本の方位観と国土観」

〈二〇一三年二月二五日〉

細井浩志「古代の時刻制度について」

佐藤早紀子「天下」観と天下触穢

畑中彩子「親王にとっての過去・未来―『吏部王記』重明親王を例に―」

神戸航介「熱国・亡国概念と摂関期の地方支配」

■第五回研究会

〈二〇一四年二月二五日〉

劉 暁峰「比較文化視野の『本朝月令』研究」

林部 均「律令国家と畿内産土師器―土器からみた国家の空間認識とその変遷―」

〈二〇一四年二月二六日〉

上島 享「日本中世における〈冥界〉観―顕界と冥界―」

榎本 渉「遣明使を守る神々」

古松崇志「二〇―二世紀ユーラシア東方における天下観」

■第六回研究会（於・対馬）

〈二〇一四年三月二二日〉

横内裕人「豆酸多久頭魂神社の中世史料」（多久頭魂神社にて）

対馬南部の古代―中世遺跡（天道法師塔ほか）の見学

井上亘「亀卜の時空―神話と儀式の現在―」

〈二〇一四年三月二二日〉

坂上康俊「金田城跡調査研究の成果と課題」（金田城跡にて）

金田城跡、対馬北部の古代―中世遺跡（黒瀬観音堂ほか）の見学

〈二〇一四年三月二三日〉（対馬歴史民俗資料館にて）

亀卜関係資料、対外関係史料の検討

細井浩志「対馬の亀卜資料」

榎本 渉（えのもと わたる）

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。博士（文学，東京大学）。国際日本文化研究センター准教授・総合研究大学院大学准教授。

『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀——』（吉川弘文館，2007年），『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社選書メチエ，2010年），『南宋・元代日中渡航僧伝記集成 附 江戸時代における僧伝集積過程の研究』（勉誠出版，2013年）。

武田 和 哉（たけだ かずや）

1965年生。立命館大学大学院文学研究科博士前期課程修了。大谷大学文学部人文情報学科准教授。

『草原の王朝・契丹国（遼朝）の遺跡と文物』（主編，勉誠出版，2006年），「平城京——都城の発展——」（吉村武彦・川尻秋生・山路直充編『都城——古代日本のシンボリズム——』青木書店，2007年），「東アジア世界からみた平城京」（『季刊考古学』112，雄山閣，2010年）。

倉本一宏（くらもと かずひろ）→別掲

荒木 浩（あらか ひろし）

1959年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都大学博士(文学)。国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授。

『徒然草への途——中世びとの心とことば』（勉誠出版、2016年）、『かくして『源氏物語』が誕生する——物語が流動する現場にどう立ち会うか——』（笠間書院、2014年）、川端善明・荒木浩校注『新日本古典文学大系41 古事談 続古事談』（岩波書店、2005年）。

横内裕人（よこうち ひろと）

1969年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程所定単位修得後退学。博士(文学、京都大学)。京都府立大学文学部教授。

『日本中世の仏教と東アジア』（塙書房、2008年）。

徳永誓子（とくなが せいこ）

1971年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程修了。岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授。

「後鳥羽院怨霊と後嵯峨皇統」（『日本史研究』512、2005年）、「『庶民の出産図』の陥穽——「融通念仏縁起」をめぐって」（『比較日本文化研究』15、2012年）、「修験道の成立」（『修験道史研究入門』岩田書院、2015年）。

劉 曉峰（りゅう きょうほう）

1962年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。中国、清華大学歴史系教授。

『東アジアの時間』（中華書局、2007年）、『日本人の顔』（中央翻訳出版社、2007年）、『端午』（三聯書店、2010年）。

井上直樹（いのうえ なおき）

1972年生。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程退学。京都府立大学文学部准教授。

『帝国日本と〈満鮮史〉——大陸政策と朝鮮・満州認識——』（塙書房、2013年）、「六世紀末から七世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交」（『朝鮮学報』221、2011年）、「『日本書紀』からみた5世紀後半～6世紀初の百濟——文周王から東城王までの王統系譜の再検討を中心に——」（『全南地域馬韓諸国の社会性格と百濟』学研文化社(韓国)、2014年）。

河上麻由子（かわかみ まゆこ）

1980年生。九州大学大学院人文科学府博士後期課程単位修得退学。奈良女子大学大学院人間文化研究科准教授。

『古代アジア世界の対外交渉と仏教』（山川出版社、2011年）、「ベトナムバクニン省出土仁寿舍利塔銘、及びその石函について」（『東方学報』88、2013年12月）、「『職貢図』とその世界観」（『東洋史研究』74-1、2015年6月）。

西本昌弘 (にしもと まさひろ)

1955年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。関西大学文学部教授。

『日本古代の王宮と儀礼』(塙書房, 2008年), 『日本史リブレット人 桓武天皇』(山川出版社, 2013年), 『飛鳥・藤原と古代王権』(同成社, 2014年)。

今津勝紀 (いまづ かつのり)

1963年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学。岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。

『日本古代の税制と社会』(塙書房, 2012年), 「日本古代地域史研究の新視点——空間分析と生態学的アプローチ——」(『歴史評論』786, 2015年)。

大津透 (おおつ とおる)

1960年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学大学院人文社会系研究科教授。

『律令国家支配構造の研究』(岩波書店, 1993年), 『日本古代史を学ぶ』(岩波書店, 2009年), 『律令制とはなにか』(山川出版社, 2013年)。

武井紀子 (たけい のりこ)

1981年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。弘前大学人文社会科学部准教授。

「古代日本における贓贖物の特徴」(『東方学』第125輯, 2013年), 「律令財政と貢納制」(岩波講座『日本歴史』第3巻古代3, 岩波書店, 2014年), 「古代における倉庫出納業務の実態」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第194集, 2015年)。

細井浩志 (ほそい ひろし)

1963年生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学, 九州大学)。活水女子大学文学部教授。

『古代の天文異変と史書』(吉川弘文館, 2007年), 『古代壱岐島の世界』(編著, 高志書院, 2012年), 『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』(吉川弘文館, 2014年)。

井上亘 (いのうえ わたる)

1967年生。学習院大学人文科学研究科博士後期課程修了。常葉大学教育学部教授。

『虚偽的「日本」』(中国社会科学文献出版社, 2012年), 『偽りの日本古代史』(同成社, 2014年), 『古代官僚制と遣唐使の時代』(同成社, 2016年)。

畑中彩子 (はたなか あやこ)

1973年生。学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程修了。東海大学文学部歴史学科日本史専攻専任講師。

「労の基礎的考察——八世紀における用法と実態——」(笹山晴生編『日本律令制の構造』吉川弘文館, 2003年), 「長登銅山遺跡出土の銅付札木簡に関する一試論」(『木簡研究』25号, 2003年), 「長屋王家の「竹」——タケ進上木簡から考える古代のタケの用途——」(『古代文化』第65巻第4号, 2014年)。

執筆者紹介(収録順)

吉川 真司 (よしかわ しんじ)

1960年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。京都大学大学院文学研究科教授。

『律令官僚制の研究』(塙書房, 1998年), 『天皇の歴史02 聖武天皇と仏都平城京』(講談社, 2011年), 『シリーズ日本古代史③ 飛鳥の都』(岩波新書, 2011年)。

倉本 一宏 (くらもと かずひろ)

1958年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。博士(文学, 東京大学)。国際日本文化センター教授・総合研究大学院大学教授。

『日本古代国家成立期の政権構造』(吉川弘文館, 1997年), 『摂関政治と王朝貴族』(吉川弘文館, 2000年), 『蘇我氏』(中央公論新社, 2015年), 『戦争の日本古代史』(講談社, 2017年)。

宇野 隆夫 (うの たかお)

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。塚塚山大学文学部教授。

『荘園の考古学』(青木書店, 2001年), 『実践 考古学GIS』(編, NTT出版, 2006年), 『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』(編, 勉誠出版, 2010年)。

下垣 仁志 (しもがき ひとし)

1975年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学大学院文学研究科准教授。

『古墳時代の王権構造』(吉川弘文館, 2011年), 『考古学的思考の歴史』(翻訳, 同成社, 2015年), 『日本列島出土鏡集成』(同成社, 2016年)。

門井 直哉 (かどい なおや)

1971年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。福井大学教育学部教授。

『敦賀周辺の古代交通路と地域認識』(鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版, 2011年), 「古代日本における畿内の変容過程——四至畿内から四国畿内へ——」(『歴史地理学』54-5, 2012年), 「文学にみる七・八世紀の交通——『万葉集』『日本霊異記』より——」(館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報 2 旅と交易』吉川弘文館, 2016年)。

林部 均 (はやしべ ひとし)

1960年生。関西大学文学部卒業。国立歴史民俗博物館研究部考古研究系教授。

『古代宮都形成過程の研究』(青木書店, 2001年), 『飛鳥の宮と藤原京』(吉川弘文館, 2008年)。